

Title	タゴールの日本国家主義(ナショナリズム)批判
Sub Title	
Author	白田, 雅之(Usuta, Masayuki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1969
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.4 (1969. 3) ,p.123(621)- 123(621)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究発表要旨 彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690300-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

りインド洋貿易の実権を握ろうとした。一方インド洋貿易に関しては、マムルーク朝エジプトが重大な利害関係を有していた。というのは、インド洋—紅海—地中海という既存のルートを経る、いわゆる東方貿易は、それに対する高関税政策によつて、マムルーク朝にとつてきわめて重要な意義をもつていた。またマムルーク朝を利害関係を同じくしていたのは、同じルートの地中海側の貿易権を握つていたヴェニスである。かくしてマムルーク朝はヴェニスの援助等を得て、アミール・フセインをインド洋に派遣し、ポルトガル艦隊と対決したが（一五〇八年）、ポルトガルのインド副王フランシスコ・アルメイダに敗れてしまった。しかしポルトガルのインド洋征覇も完全なものではなく、これによつて東西間の貿易が構造的に変化をこおむるということではなく、単に軍事的に拠点をおさえたにすぎなかつた。旧ルートによる東西貿易は数年の間、一時的に衰えたにすぎなかつた。しかしマムルーク朝にとつてこの遠征の財政的負担と、関税収入の減少はそれまでで弱体化していた国家財政に一層の拍車をかけ没落へと進んでいった。

タゴールの日本ナショナルイズム主義批判

白田雅之

この研究発表は、大正五年（一九一六年）に、タゴールが初めて来日した時に行われた、東大と慶応における二つの講演を検討したものである。

分析の契機は、二つの講演が、日露戦争後顕著になつた日本の国家主義的傾向をテーマとし、それに批判を加えたものでありながら、当時の日本知識人の反応を見る時、そのテーマの重さへの驚くべき閑却があつたという点である。

日本において、タゴールが思想家として、まともに取り組まれたことが曾てないことは、竹内好氏が再三指摘されてきたとおりである。この研究は、タゴールのナショナルイズム国家主義批判がロマン・ロランに与えた衝撃を対極におきつつ、何故日本においては、そのテーマが正当に問題にされなかつたかを、タゴールの講演を整理して紹介しながら、所謂「近代化」の問題とからめ、大正五年の時点に焦点を合わせて、できるだけ実証的に明らかにすることを試みたものである。

西洋史学会例会

昭和四十三年五月二十九日 於三田第一会議室

マーシャル・プランについての史的考察 小川決子

イギリス史の諸問題 森岡敬一郎

昭和四十三年六月十二日 於三田第一会議室

比較文化史—周辺文明の存在 有富 英洋

ピューリタニズムの起源—トリネリユードの見解をめぐつて

上山 雄治

昭和四十三年十月十六日 於三田五四三番教室

一九一四年の七月危機末における独逸関係 米田 治